

まず一般的な原則として、

- ① 個人に対する撮影、録音の前には本人同意を取る。
- ② 一度拒否された場合にはそれ以上誘わない。

*この2点によって、報道取材について、住民の側に選択権がある、という感覚を与えることが大切であると思われます。また報道から、ある意味で身を守る為の手續きを与えることも重要と思います。

1 地域報道については

(突発的な事態のない限り)取材をしない時間帯を設ける。

*地域生活の上での何気ない散策や、近所のものとの会話、買い物などの日常活動を回復させることは、ストレスからの回復にとって非常に重要です。逆にこうした基本的な行動が監視されているかのように思われることは、重圧感を生じさせます。報道からある意味で自由になる時間帯を設けることは、住民の回復を促進する上で有益と考えます。

2 医療に関する報道については

- ① 病院等医療機関、また健診会場の門前での取材・撮影はしない。
- ② 上記施設の敷地内での受診者の撮影はしない

*この点は非常に重要です。このような非日常的な事件に巻き込まれた場合、世間では何と言っているのかという被害的な意識を持ちやすくなります。そのために日常生活でも人目を避けるようになっていたり、特にはさらに思い詰めた世界に入ることもあり得ます。医療機関は、たとえ内科などの身体科であっても、そのような気持を訴えることの出来る数少ない場があります。そうした機関へのアクセスを阻害することは大きなマイナスとなります。

また来年には再度の住民健診も予定されておりますので、その際に、住民の受診を妨げるような要因はできるだけ減らしたいと考えております。

3 悲劇性についての報道については

今回の事件の責任はあくまで犯人の卑劣な行為にあり、それに巻き込まれた住民の側にはないことを明確にする。

*個人ごとの事例を見ますと、たまたま誘い合わせた相手が被害にあったとか、嫌がる子どもにカレーを食べさせてしまったなどという事情があり、そのために自責感を生じている場合が多く見受けられます。その結果、非常に深刻な精神的問題が生じている場合もあります。事件の悲惨さを強調するあまり、巻

き込まれた人間の自責感を刺激することのない様にご配慮いただきたいと思
います。その結果、医学的に非常に重篤な事態を生じる懸念が現実が生じてお
ります。

実際にどのような精神的な問題が生じているのかにつきましては守秘義務がございます
ので、本状では控えさせていただきます。しかし最悪の場合、生命に関わる事態も生じ得
ると判断しております。

ご多忙の所、お目通しいたきまして眞に有り難うございました。住民の精神的な回復
を願う気持からの文言でございますので、どうか失礼な点をお許し下さい。

貴社の益々のご発展をお祈り申し上げます。

敬具

資料5 ペルー事件事例 (修正・再構成による)

以下に人質二例、その妻一例、計三例の架空の事例を掲載する。
三例とも、複数の事例を一つの典型例として、修正の上再構成した
ものであり、実際にはこのような事例は存在しない。面接に当たっ
ては記録については全体をまとめた形でしか公表しない、という約
束をしたためにこのような手法を取った。しかし事件の臨場感を伝
え、元人質と家族の心理的な体験を近似的に伝える上では十分に有
効であると考えられる。

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

再構成事例 A

事件との関わり：

ペルー軍が突入するまで、解放されることなく、人質生活を送った。

人質生活：

○死の恐怖

特に最初の方は相手のことが分からないので怖かった。死についてやはり考えた。一人ずつ銃殺……という考えも浮かんだ。そういう状況になったら、あまりみっともなくなりたくないな、と思っていた。実際には、ゲリラからの直接の脅しはなかったが、人質の誰かが突飛な反撃をして殺されるんじゃないか、そうしたら、その後ではゲリラも殺人が平気になるのではないかと心配した。ペルー軍が人質とゲリラを一緒に殺すのではないかと、いう恐れもあった。日本人は軍人などが多く含まれるペルー人よりは待遇がよく、そのうちゲリラと友達になったりもしていた。

○解放への期待

クリスマス、正月、2月のトロント会議、セマナサンタと、何かある度に解放への期待が上がるのを自分でも感じた。何回か解放が流れるうちに、最後の方は焦りも出てきて、そろそろ限界かなという意見が人質仲間の間でも出始めた。自分も平和解決はもう駄目だ、やはり最後は武力突入になると覚悟した。最後の一月はきつかった。軟禁状態なので、みなニコニコはしているが……。ペシミスティックになっていた。

○人質仲間との関係

人質仲間は、同じ部屋にいたのでお互いの気持ちが分かる。誰かを見て、今日は気分が悪くなっているな、というときには、それをつつくり表面に出ないように配慮していた。人質同士で角の立つ表現は避けていた。それでも、落ち込みが激しい人のことはみなで慰めたりもした。人質の中にも色々な人がいた。ショックを受ける人も、楽しくしている人も。ただ、人質生活にしては衣食住に恵まれているとはいえ、狭い部屋にみな一緒だと、いびきや寝言などでよく眠れなかった。寝ていても途中で目が覚めることがしょっちゅうあった。プライバシーがないのはつらい。

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

○家族への気遣い

拘禁中は、家族のことが心配だった。もっと家族と一緒にいればよかったかな、昔から仕事優先だったかな、などとも考えていた。家族への手紙には心配させるようなことは書かず、冗談などを書いたりもした。

○武力突入時

自分は冷静だったと思う。驚く暇もない、ぼーっとしていた。何処に逃げたらよいかもわからなかった。銃撃戦中は伏せて待っているのがつらかった。火事がせまったときは、これで死ぬかと思った。ペルー兵士が下から飛べというので、逃げていたバルコニーから下に飛び降りた。足が痛かったが、必死で公邸から離れるために走った。後で、自分が突入時に叫んでいた言葉を他から聞いたが、全く覚えていなかった。

解放後の生活：

○解放直後の状態、周囲の反応

直後一週間くらいは不眠だった。気分がハイになって高揚している感じもした。普段の生活でも、音に過剰に反応していることが、一ヶ月くらいはあったように思う。アクションドラマの中の銃声や、爆発音を避けていた。

日本に帰国し、しばらくは人間ドックに入っていた。人質事件のお陰で1・2ヶ月は一躍「時の人」のような扱いだった。色々な人が会いにきたし、挨拶回りもあった。本当に疲れが取れたのは6月も末になってからだと思う。解放を祝って友人や会社の人間と酒を飲んだが、それは気持ちよく以前と変わらず飲めた。食事も普通に食べられた。

マスコミは報道の効用はあると思うが、会いたくはなかった。解放当日は自宅に取材申し込みが殺到した。自分の名前や顔写真が現地の新聞に出ることへの不安も少しあった。

ただ、事件の話をしたくないとかそういうことはなかった。同じ話を何度もさせられたが別に苦痛ではなかった。

○気持ちの変化、現在の心境

人生観の変化はないが、今回の事件が自分の人生で一番大きな出来事であるのは確かだ。以前と変わらない生活に戻ったが、物事の優先順位が変わった感じはする。安全には用心深くなっていると思う。

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

○仕事への復帰

最初は自分が周囲から妙に思われているのではないかと不安もあった。周囲とのペースのギャップもあったと思うが、会社が休ませてくれたので目立たなかった。スムーズに復職できたと思う。拘禁中も仕事のことが気になっていたが、自分が何ヶ月もいなかったのに、会社は全く変わっていなかったから、休んでも大丈夫だったんだな、と思った。

その他：

○テロリストへの気持ち：

全員殺されたことについては、あまり感情移入して考えないようにしている。自分自身が辛うじて助かった状況だから、武装していた以上は仕方ない。

○要望・希望など：

テロへの対策を強化して欲しい。あとは、以前と同じ生活がしたい。

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

再構成事例B

事件との関わり：

ペルー軍が突入するまで、解放されることなく、人質生活を送った。

人質生活：

○死の恐怖

死ぬことも覚悟していた。最悪の場合は処刑があるかもしれないとも想像した。でも、テロにあったときに、*déjà vu* のように、こういう事はいずれあるなど、思い描いていたことが現実になったような感覚がした。思えばテロにあう前から、長年会わなかった友人や親戚に会う機会が次々にあった。ああ、あの人たちはみんなお別れに来てくれたのだな、などとも思った。

ゲリラと同じ部屋に寝たことがあったが、何かされるのではないかと眠れなかった。夜中にトイレにと立つときには、廊下に見張りがいたので、わざと大きな音をたてたり、蝋燭に火を付けそれを廊下に先に出したりして、間違っ撃たれないようにしていた。

○解放への期待

3月のイースター解放が流れた後は、一年くらいは出られないだろうと覚悟した。長期戦に耐えるためには自然体で行こうと思った。だが、そう覚悟するまでには、悶々とした。拘禁の長期化に耐えるために、腹筋運動などもしていた。

○人質仲間との関係

人質が解放されてゆき、部屋が空くまでは人が多くて大変だった。いびきなどをかいている人がいた場合には起こして良いというルールになっていた。日本人、ペルー人ともによく感情を自制していたと思う。ペルー人は軍人、警察、裁判、政治家ごとに別の部屋にされていたので、同じような考えで統一が取れていたようだ。碁や将棋などをしていた人はいいが、そうでない人は、これからのことについて悪いことばかり考えていたようだった。

○家族への気遣い

やはり、会えないので心配だった。家族には、いざという時のために遺書のようなものも書いた。自分については死ぬかもしれないがそれは仕方ない、とっていたが、家族

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

が交通事故に遭ったり、泥棒に入られたりすることが、あってはいけないと心配した。

○武力突入時

最初の爆発が起きた時は空気の振動で、横隔膜が揺らされるような衝撃を感じた。生きた心地がしない感じだった。天井や床が抜けるのではないかと思った。煙でほとんど息もできなかった。床上30～40cmだけきれいな空気だったので、床を這って逃げた。カーペットが焼けるガスの臭いがした。銃弾が飛んできたが、火が迫ってきたため、バルコニーに出てそこに伏せ、兵士の指示で脱出した。ゲリラの女の子が震えていたという話もあったが、その姿は覚えていない。見えていなかった。

解放後の生活：

○解放直後の状態、周囲の反応

解放直後は疲れ切っていたせいか、精神的な変化も感じなかった。解放直後は眠れたが、かえって今はまた拘束中のように朝早く目が覚める。しかしこれは、年齢のせいもあると思う。

花火の音を聞いて一瞬、またテロリストの襲撃があったのかと思った。花火の音はあのバチバチという感じが突入時の爆発音と似ているので、心臓に悪い感じだ。

思いがけず多くの人が心配していて、負債を背負ったような気もした。一度に対応しきれないくらい、人が集まった。

○気持ちの変化、現在の心境

事件自体の衝撃は減ってきていることが実感できる。ただ、公邸内にいたときには、結局、現実感を切り離すことで様々な気持ちを解決してきたところがある。それが、急にリアルな世界に放り込まれたので戸惑っている感じもする。

これからのことは前向きに考えたい。PTSD症状が出ているとかは言われたくない。リハビリテーションをしたい。

また、同じ事件が起きるのではないかと、車に乗っていても何処からかドスンとくるんじゃないか、とも思うが、生き延びるんじゃないか、とも思う。

マスコミに取材されるとまた事件のことを思い出す。できるだけ忘れてしまいたいので、話題にして欲しくない。今でもゲリラに関するテレビをみても、それに関する話をしたくない。

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

○仕事への復帰

仕事のことは人質になっている間も気になっていた。仕事はどうなっているか情報が欲しいと思っていた。もう、働けないと周りに思われたくないという気持ちには、公邸内で解決を付けた。

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

再構成事例C

事件との関わり：

テロリスト襲撃時に公邸内にいたが、数時間後に解放された。夫はペルー軍が突入するまで、解放されることなく、人質生活を送った。

テロリスト襲撃時：

○死の恐怖

襲撃の瞬間は、映画のセットのエキストラみたいな感じで銃撃戦を聞いていた。阿鼻叫喚にはならなかった。ちょっと感覚が麻痺していたのかもしれないが、ここで取り乱したら恥ずかしいと思った。本当に怖いと人は冷静になるのだと思う。死ぬかもしれない、子どもがいるからいやだな、と思った。

しかし後で、冷静ではなかったなと思ったのは、あの時横にいたのが友人なのにそれが分からなかった。

家に帰ると自分たちの居場所が分からないので、子どもがパニックになっていた。後はこれからのことをどうしようかと頭が一杯だった。日本と色々連絡した。

夫の拘束中：

○心配

夫が殺されるかと思った。そうしたら、子どもの学費はどうしたらいいんだろう、などということまで考えた。セマナサンタで解放かと思っていたら、解放されずガクツときた。子どもの新学期には間に合うかとも思ったが、それも間に合わなかった。4月の半ばも過ぎると、もう駄目かもしれない、疲れちゃったと思い始め、夜中に涙もろくなった。

夜は何かあるかもしれないと聞かされていたので、夜が怖かった。何かあったら困ると、事件があったときにすぐに飛び出していけるように風呂も控えてシャワーにしていた。

夫へは手紙などを一生懸命送ったが、拘束が長期化するにつれて、途中から中だるみのようなところもあった。

○周囲との関わり

夫の拘束中は、日本の親戚への対応やマスコミへの対応で心配することや、しなくてはいけないことが他にもあった。

気が滅入ったらいけないので、遊びにいきましょう、と友人に誘ってもらい、その時は

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

気が晴れた。

一人だけ夫が事件に巻き込まれていたら参っていたと思う。人質の家族同士のサポートがあつて、互いに慰め合っていた。

○武力突入時

突入の模様を中継するテレビ映像を正視することができなかつた。最初に自分が襲撃されたときは現実感がなく冷静だったが、最後の日は突然で、動揺した。一人であの映像を見たら耐えられなかつただろう。でも、これで蛇の生殺しは終わって決着がつく、という意味では嬉しかった。

映像の中で MRTA の旗が破られたので、あ、成功したのだ、と思った。なかなか、夫の安否が分からず、途中、大丈夫との連絡があつたが、信じるのは待とうと思った。3時間ほどして本当に無事が確認できた。

解放後の生活：

○解放直後の状態、周囲の反応：

解放された日は、知らせを聞いて20～30人位の客がきて、その食事の支度をした。テレビを見る暇もなかつた。夫は寝たが、救急車の音を聞いて途中でがぼっと起きてきた。その後もう一度寝ていた。自分は全く眠れなかつた。

○夫の事件後の様子

手紙では公郵から出たら色々話すと書いてあつたが、今に至るまであまり話さない。話したくないのかもとも思う。私としては特に話さなくてもいいかなと思つている。夫は気にしない性格で、夫婦ともども事件の後遺症はないようだ。

○気持ちの変化、現在の心境

良い方に考えれば、あの事件で家族の絆は強まったし、子どもも成長したと思う。人の親切など良い経験になつた。

その他：

○要望・希望など

ペルーでは情報統制がしかれており、人質事件に関するニュースはあまり流されなかつ

この事例は複数の面接結果を基に、修正の上、再構成したものである。多くの元人質ないし家族の心理的状況を集約して伝えるためのものであり、こうした事例そのものが実際に存在するわけではない。

た。そのため、日本の方が情報があつたので、詳しい情報が欲しかった。

マスコミへの対応や対策を統括して行ってくれる所があればよかった。

夫が拘束中は、外出やスポーツをするのもためられる状態だった。解放後ではなく、早くに精神科医が来て外出にもメリットがあることを言ってくれていたらと思う。

人と話すことが最大のストレス解消法だったが、時間予約制のカウンセリングが欲しいのではない。何かあつたときに今聞いて欲しい。だから、日本に着払いの相談のためのホットラインなど設けてもらえたらよかったと思う。

平成10年度厚生科学研究補助金（健康科学総合研究事業）

災害犯罪時のストレス性障害の予後予測とヒアリング技法の研究報告書

発行日 1999年4月5日

発行者 「災害犯罪時のストレス性障害の予後予測とヒアリング技法の研究」研究班
班長 金 吉晴

発行所 国立精神・神経センター精神保健研究所

〒287-0827 千葉県市川市国府台1-7-3

Tel：047-372-0141 Fax：047-371-2900
